

# 第16回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



中学生の部 優秀賞 受賞作品

『癒しの宿場町』

東京都

白百合学園中学校

二年 伊古田 萌加

## 癒しの宿場町

白百合学園中学校 二年

伊古田 萌加（いこた もえか）

私が住む東京都、板橋区仲宿。ここは古くは江戸と京都を結ぶ中山道の最初の宿場町であったため、仲宿という名前がついたと聞いています。私は、生まれてから十四年間この街に住み、街の方々に可愛がられて育ってきました。学校は千代田区にありますが、そこから電車で二十五分もすれば大都会とはまた違った、なんとまあ昔ながらの良い味わいのある商店街が広がっています。デパートやショッピングモールといった今風の現代的なものとは違った、お店の人と顔を見ながら、そして話をしながら買い物をするというスタイルです。なじみのあるお店の人と話をすると日常での疲れもせせらぎが聴こえてくるような小川にすつと流されていく気持ちになります。ほっとして、安心する思いが心に湧き出し、ホームに帰ってきた！ と思える場所が私の街です。

新しいマンションが建つことにより、昔ながらのお店がいくつか姿を消していきました。その一つがよく通っていたおもちゃ屋さんです。物心がつく前から毎日のように通っていて、昭和の古き良きゲームがたち並び、奥に進んでいくと、笑顔で歳を召されたおじいさんとおばあさんが迎え入れてくれました。カウンターの前には、おいしそうな昔ながらの駄菓子ケースの中にびつりと詰め込まれているではありませんか。小さかった私は宝宝箱の中にキラキラと光るなんとも魅力的なものに感じて、マシユマロや金平糖など、好きなお菓子を母にねだっていたものでした。そして、母からオッケーが出ると、まるで大人になったかのように誇らしげに、そして、一つの冒険が始まるように

「マシユマロ二つとこの緑のカレー味を三つお願いしますー！」

と、言いに行くのもそこで過ぎず時間の嬉しいひとときなのでありました。おもちゃ屋さんにあったゲーム機は今のゲームセンターでは見かけないような一昔前のものでありました。シンプルな作りながら、十円玉がどの穴に入るかによって当たり外れが決まるのでレバーを引く絶妙な力加減という技術力が必要なものでした。夕方になると、私を含めた、近所の子供達や仕事帰りの大人達が集まり狭い店内はびつり！ お互い、技の凄さを褒めたたえ合いながら自分の順番が来る瞬間まで胸を高鳴らせ、また、手に汗をかきながら待っていたものでした。

でも、私が小学二年生だった時、おじいさんとおばあさんからお店を閉めることになった話を突然聞かされました。いつもその場所にあったホッとできる空間がなくなってしまうというのが初めての経験で心の中にぽっかり穴が空いたような気持ちになりました。何よりそこでいつも可愛がってくれていたおじいさんとおばあさんは埼玉に引っ越すということで、もう簡単には会えない現実を知り寂しく、そして、夢の樂園がこの商店街から消えてしまう思いで悲しい気持ちになりました。おもちゃ屋さんの最後の日、入りきれない位の人が集まり、おじいさんとおばあさんは若い時に戻ったようだと言っていたけれど、満面の笑みを浮かべて幸せそうでした。

「お店は続けられないけれど、いつまでも、もえちゃんの心の中での思い出はなくならないからね」

と、おっしゃってくださいました。赤ちゃんだった頃から可愛がってくださいだったので、当時小学二年生まで成長した私を見て、

「こんなに大きくなって」

と、目に涙を浮かべながら喜んでくださいました。今、その場所には新しいマンションが建ち、通る時、私の胸が少しチクチクするんです。おじいさんとおばあさんの笑顔を思い出して。でもおじいさんとおばあさんがこの商店街で代々続けてきたおもちや屋さんを通して、私を含め多くの人に安らぎと癒しを与えたことは確かです。そして、みんなの心の中でその思い出はずっと消えない。その場所を通ると、その時の記憶が蘇るから。

仲宿商店街にはこのおもちや屋さん以外にも私を見守ってくれている昔ながらのお店がたくさんあります。お米屋さん、コロッケ屋さん、お肉屋さん、八百屋さん。たくさん心がほかほかする思い出がいっぱいです。毎日、何気ない会話を繰り返しながら、私は穏やかな日常を送ることができています。

仲宿商店街はほっとする、安心する場所であり癒しを与えてくれます。私の街は昔、宿でみんなの疲れを癒した街の癒しパワーが今も残存してるようです。私が住む街は「癒」の街なのです。